

第3回OAG・ドイツ日本学会で研究報告を行なって

田中 敏

昨年（平成4年）3月11日から13日迄の3日間、OAG・ドイツ東洋文化研究協会主催（在日ドイツ大使館、国際交流基金後援）による第3回OAG・ドイツ日本学会が「日本の美学」という総合テーマで東京赤坂のドイツ文化会館で開催された。この学会はドイツ人の日本研究者の学会で、昭和63年（1988年）に第1回が開かれて以来、隔年毎に東京で開催されている。日本人の参加も歓迎しているので、私は第1回から参加してきたが、今回初めて“Auswirkungen der japanischen Ästhetik auf die Wirtschaft und Politik im heutigen Japan”（「今日の日本の政治・経済に見られる日本の美学の功罪」）と題して研究報告を行なった。その研究報告に加筆したものをここに掲載させていただくが、それに先立って、OAG・ドイツ東洋文化研究協会の来歴と現在の活動、並びにOAG・ドイツ日本学会の動向を簡単に紹介し、併せて私たちが欧米人に向かって日本について語るときの我々の姿勢について私見を少し述べてみたいと思う。

OAG・ドイツ東洋文化研究協会（Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens 通称：OAG）は明治6年（1873年）、当時在日していたドイツ人の外交官、学者、商人たちによって、東アジアの国々、特に日本の文化の研究と普及、並びに日本に関するドイツ語による著作の出版を目的として設立された。日本文化の普及という主旨から会員は日本研究のドイツ人専門家に限定することなく、むしろ日本文化に興味と関心を持つ一般のドイツ人が主な構成員となっている。ただ協会の企画運営はドイツ人の日本研究者がこれに当たっている。また、本会の目的に賛同する者ならドイツ人に限らず入会することが出来、私は昭和50年（1975年）からの会員である。

設立以来OAGは二つの大戦を体験し、苦難の時期はあったが、活動は中断させることなく今日に至っている。近年日本の経済発展に伴い欧米において日本文化の研究が盛んになると、OAGは名実共にドイツの日本研究の中心となった。特にOAGは現代（第二次大戦後）の日本の研究とその出版に力を入れ、業績をあげている。その間大阪、神戸、またドイツ本国のハンブルクにも支部ができ、現在、会員総数約790名、内訳は、ドイツ人他外国人540名、日本人250名となっている。赤坂のドイツ文化会館はOAGの所有で、ここに事務所があり、ホール、会議室、図書館を有して各種の催物を行なっている。最近のOAGの活動は多岐にわたり、毎月複数回の講演会を催すほか、来日したばかりのドイツ人留学生のための日本入門ゼミナール、滞日年数の長い一般ドイツ人を対象にしたゼミナ

ール、日本研究の専門家たちのゼミナールをそれぞれ毎月一回開いている。日本国内、および東アジア諸国への研究旅行、日本の伝統芸術の観賞、見学なども定期的に企画され、また、ドイツ人のための「日本語講座」「生け花講座」なども開かれている。最近のそれらのいくつかを拾ってみると次のとおりである。

講演： エキゾチズムの日本人論

日本 — 忙しい島国

日本に民主主義は存在するか

日本の軍事力

日本の教育にみられる画一性と規格性、及びその社会的効果

一般ゼミナール：

日本の宗教（神道、仏教、キリスト教、新興宗教、迷信）

教育と社会（日本の家庭、塾、教育ママ、道徳教育）

婦人問題（婦人運動、女性とポルノ、売春）

専門ゼミナール：

神道における神学の可能性について

日本人の死生観

見学： 両国界限、上野国立博物館、東郷神社（朔旦祭）、能楽観賞、高野山

講演者は主にドイツ人の日本学者であるが、時には日本人が講演することもある。しかし、ドイツ語で話さなくてはならないので、講演者はかなり限られることになる。日本人では例えば次の人たちが講演している。

属 啓成： 日本における西洋音楽

加藤周一： 徳川時代の遺産

西尾幹二： 自由を知らなかった東ドイツ人の幸せ

OAGの出版活動は盛んで、設立以来200点余りに及んでいる。それらは次のように分類することが出来る。1) 研究論文 2) 特に反響のあった講演を小冊子にしたもの：「OAG AKTUELL」 3) OAGが企画したシリーズもの 4) 日本の新聞・雑誌のなかの記事、論文等のドイツ語訳：「Japan direkt」（年2回）などである。以下にそれぞれの例を示すと次のとおりである。

1) 論文： 日本の農業とエコロジー

日本 — 女性の国？

軍事大国日本？ 日本の安全保障政策と防衛力

若き 大杉 栄

2) “OAG AKTUELL”

日本の社会における“お金”の問題

日本における外国人労働者問題

日本の新興宗教

リクルート事件

3) シリーズ：

現代の日本 i) 日本の女性 ii) 日本人とお金 iii) 日本の住まい

- iv) 日本の企業 v) 日本人の考え方
- 4) “Japan direkt”
- 「“西ドイツに見習え”論のうそ」西尾幹二（諸君）
 - 「パパは単身赴任」（読売新聞）
 - インタビュー「臨教審委員に聞く」（朝日新聞）
 - 「アテナウアーと吉田 茂」大嶽秀夫（中央公論）

OAGが第1回のドイツ日本学会を企画、開催したのは、昭和63年（1988年）の4月であった。日本人および第三諸国の人々にも参加を積極的に呼び掛けた。第1回では特に総合テーマを決めなかった。開催前日の4月6日の晩にウィーン大学の日本学教授ゼップ・リンハルト博士の「日本における娯楽の歴史について」という記念講演があって、7日、8日の両日にわたって20件の研究報告、2件の研究予定に関する報告、そしてパネル・ディスカッションが行なわれた。日本人の研究報告者は残念ながらいなかった。研究報告のいくつかを挙げれば次のとおりである。

- 邦楽界における閉鎖性
- 日本の芸術における「あそび」について
- 国際化という試金石としての日本における韓国人問題
- 有賀喜左衛門の社会学とその日本人論との関係
- 日本の家庭教育について
- 日本映画の現状
- 日本市場の国際化と自由化

パネル・ディスカッションは「ドイツ在住のドイツ人日本学者と日本在住のドイツ人日本学者の連携の可能性について」というテーマで行なわれた。

第2回は平成2年（1990年）3月7日～9日に開催された。今回は「日本における中心と周辺」という総合テーマが設けられた。テーマが限定されたためか、研究報告が10件と前回よりも少なかったが、今回は日本人の研究報告が1件あった。報告の主なものを挙げると次のとおりである。

- やくざ — 排除された下位文化か、或いは容認された日本社会の一部分か
- アイヌ文化における中心と周辺
- 大嘗祭 — 未公開の部分（秘儀）と一般公開される部分
(報告者 中村 郁夫)
- 親鸞の越後滞在とそれが彼の後の信仰に及ぼした影響
- 浄土真宗の本願寺派と別派

総合テーマがパネル・ディスカッションのテーマとなった。

私が研究報告をした第3回ドイツ日本学会は「日本の美学」を総合テーマとして行なわれた。16件の研究報告、4件の補助報告、そしてパネル・ディスカッションがあり、第2回よりも盛会だった。日本人の研究報告者は私1人だったが、ドイツの人の研究報告の補助報告者として2名の日本人が参加した。研究報告の主なものを挙げてると次のとおりである。

些末化の美学 — 日本のテレビドラマにおける社会問題の取り扱い

文学における風景描写の美学 — 例えば三島文学において

バー（酒場）の美学 — スナックにおける会話の役割

「茶の本」 または： 美しき日本

戯画の世界 — 漫画の人気と視覚文化

江戸時代の儒教における倫理と美学の同一化について

日本における美術品取引

茶道の美学

法的限界をきめる日本人の美学

今日の日本の政治・経済にみられる日本の美学の功罪（報告者 田中 敏）

今回も総合テーマがパネル・ディスカッションのテーマとなった。

OAGの講演や研究論文のみならず、その他一般にドイツ人の書いた日本文化についての著作、或いはドイツの新聞・雑誌の日本関連記事を読むたびにいつも思うことが二つある。一つは、私たち日本人が彼らに伝えたいものと、彼らが興味を持って取り上げるものとの間にギャップがあるということである。私は何も観光向けの日本文化だけを伝えたいと思っているわけではない。日本の恥部や弱点ももちろん伝えなければならない。しかし、それらは一般的な事実という文脈のなかで捉えられて初めてその真実が理解出来るのである。ところが彼らが興味を示すのは、日本においてもごく特殊な部類に属する現象で、彼らはその現象だけを取り上げ強調する。弱点と特殊だけを組み合わせ、それ以外を切り捨てて構成した作文は、日本をよく知らない平均的なドイツ人には、さながら事実の全体像であるかのような錯覚を起こさせる。そういったものは日本の誤解に寄与することはあっても、決して日本の正しい理解のために役立つものではない。もう一つは、彼らの考え方の根底には、もはや彼ら自身自覚することができなくなってしまったほどに身にしみついている所謂西欧中心思想なるものがあって、自分たちの尺度を絶対と考え、その尺度で日本の文化を裁くという姿勢がどうしても見受けられるということである。この二つの傾向は、一といっても、この二つは別個のものではなく、互いに関連し合っている、何もドイツ人に限ったことではなく、西欧人一般について多かれ少なかれいえることであるが、ドイツ人の場合、この傾向が特に顕著であるように私には思われる。そしてそれは次のような事情によるものではないかと私は考えている。ドイツ人には、自分たちは日本人の教師であり、模範となってきたという自負があり、彼らは日本人を常にそういう立場で見ている。一方、ドイツ人は自分たちには日本と歴史的発展、運命において相似たところがあり、同じような経験をしてきたと考え、日本人に対して仲間意識と親近感を持っている。こうしたドイツ人の師としての自覚、さらには傲慢さの下に隠された親近感、相手が、つまり日本が或る枠を越えた場合とか、予想以上に発達した場合などに異常な対抗意識となって現われのである。そこに最近のドイツの日本研究や、ドイツのマス・メディアの日本関連報告に、日本の弱点や特殊事情のみを殊更取り上げて、日本の文化の後進性をうたい、自分たちの価値尺度で日本を断罪する傾向が多い所以があると私は考えている。

いずれにせよ、そのような日本研究とその普及は日本の正しい理解を妨げるものであり、ドイツと日本の真の相互理解を考えると、このままにしておけない問題である。一因みに、相互理解とは、お互いに理解し合うことであるから、我々の西洋理解についても反省してみる必要がある。我々の正しい西洋理解を妨げているものは何かというと、それは我々の西洋への限りない憧憬と幻想であると私は思っている。— 欧米人の日本に対する関心が一般的レベルで高まってきたことは歓迎すべきことであるが、彼ら欧米側の独断と偏見に日本理解を委ねておいたのでは、日本についての正確な情報は伝播されない。我々日本人も積極的に外に向かって自分をつまびらかにすることに努めなければならない。つまり世界に向かって自己の弁護をすることである。自分たちの“考え方”、即ち「文化」の弁護である。

ところが、外に対して日本を弁護しようとする日本人は非常に少ない。なぜなら、日本の所謂知識人といわれる人たちの大部分は“反日日本人”であるからである。日本では知識人は“反日”でなければならない。そして、反日日本人には日本の弁護は出来ない。

知識人嫌いの、自称俗物の福田恒存氏の次の言葉を思い出すたびに私は感動を覚える。

「良かれ悪しかれ、自己を頑強に肯定し、これを守りぬくといふところにしか、文化は存在しない」（「文化とはなにか」）

「日本を一々外国と較べるなんて愚かなまねはよさう」「日本人は日本を立派な国だともはうじゃないか、そしてそれはごく自然なことじゃないか」「自分の短所にどっかと腰を据えたらいいのです……ひとがなんといはうと、おれはおれだといふ自信、現代の日本にほしいものはそれだけです」（「自信をもたう」）

この姿勢こそ私は日本の「国際化」の原点だと思う。

外に対して日本を弁護した数少ない日本の国際人に『武士道』の著者の新渡戸稲造がいる。『新渡戸稲造全集』（教文館）全16巻のうち5巻が英文の日本紹介（もしくは弁護）の著作であることは注目に値する。日本を弁護した新渡戸について論述した興味深い著書がある。『く太平洋の橋』としての新渡戸稲造』（太田雄三 みすず書房 昭和61年）がそれであるが、著者は、新渡戸は米国へ行けば日本をほめ、日本に帰ってくれば米国をほめていと指摘して、新渡戸が日本向けの顔と西洋向けの顔の二つを持っていて、「読者（聴衆）が西洋人であるか日本人であるかによって話を変えた」ことを「新渡戸の矛盾」と非難している。著者はまた、「彼（新渡戸）の日本の歴史や文化に対する興味は自然な自発的なものというよりは、外国人や外国文化との密接な接触に際して、自分の国民的プライドを守るためにそれを拠り所とせざるを得なくなって、にわかにならざるを得たものであった」といい、『武士道』は宣教師に代表される欧米人の日本文化軽視への単なる反逆の書にすぎず、新渡戸は武士道など本当には理解していなかったことを具体的に示して手厳しく批判している。更に、平和主義者を自認する新渡戸が満州事変の折り日本を、つまり軍部を弁護する言論活動を海外で行なったという事実についても、著者は「新渡戸の矛盾」と断罪している。しかし私は、著者が新渡戸のこの種の矛盾の事例を挙げれば挙げるほど、ますます新渡戸に全幅の共感をおぼえるのである。私には新渡戸の心情が痛いほど分かる。新渡戸の矛盾は外国人や外国文化と密接に接触した日本人には避けられない当然の矛盾、否、正当なる矛盾というべきではないかと私は思っている。

日本を外に対して弁護したもうひとりの日本人に森鷗外がいる。思い出されるのは「鷗外・ナウマン論争」である。1886年、当時ドイツに留学していた25歳の森林太郎は、地質学者ナウマンの論文「日本列島の地と民」に独断と偏見を見て憤慨し、ミュンヘンの新聞紙上で駁論を加えたのである。この有名な鷗外・ナウマン論争の双方の全文をいま読むと（『若き日の森鷗外』小堀桂一郎 東京大学出版会 昭和44年）なぜこれほどまでに鷗外はいきり立たねばならなかったのか、怪訝にさえ思う。ナウマンの日本観察は必ずしも正確とはいえないが、すべて独断と偏見に満ちているとはいえない。しかし森林太郎は執拗に言葉尻に噛みついて、全力をあげて日本を弁護している。彼は、「これはただ全く私の祖国のために、そして私の同胞のために」筆をとったのである。そして鷗外もまた、新渡戸と同じように、日本へ帰れば西洋文明から学ぶことを積極的に推進する啓蒙家として活動した人である。

誤解を恐れずに言えば、日本を外に向かって弁護する者は二つの顔を持って当然だし、読者（聴衆）が西洋人か日本人かで話しを変えてしかるべきであると私は考えている。

OAGで発表した私の研究報告も聴衆がドイツ人であることを意識して行なったもので、内容も力点も日本人なら当然違ったものになったであろう。日本人が聴衆（読者）なら批判するであろう事実についても、ここでは肯定的に弁護している。

この研究報告で私が述べたことは日本人にとっては特に目新しいものではない。そもそも私は美学の専門家ではないし、勉強をしたこともない。ドイツ日本学会が日本で開かれているのに日本側からは寂として声の無いのは誠に残念に思い、鷗外の言葉をかりれば、「これはただ全く祖国のために、そして私の同胞のために」発言しただけである。

披露するほどの内容ではないが、ごく簡単に要約すれば次のとおりである。

超自然の絶対神を持たない、つまり宗教的戒律のない日本の社会において、秩序の規範となっているのは、人と人との和、即ち円滑な人間関係そのものであり、その人間関係のモラルを支えてきたのは私達の美感、美意識であった、という福田恒存氏の考えを土台にして「人間関係の美学」をキーワードに論を展開した。円滑な人間関係を最高原理とする我々の「美学」は、経済活動においては功を齎らし、政治の世界では功罪相半ばしている、というのが結論である。最後に山本七平氏の小文の一部（『日本人的発想と政治文化』日本書籍 昭和54年）を借用要約して研究発表の結びの言葉とした。即ち、我々日本人が対象を見るとき、日本人の立場で日本人の見方でそれを見る。それは当然の権利であって、イスラム教徒の立場で、あるいはアラブ人の立場でこれを見よということ自体無理と言わねばならない。自分の立場で対象を見ること、それは至極当然のことで、世界の多くの国はそれを当然としている。我々日本人にとって今、肝要なことは、我々には日本的伝統に立って日本人的見方で見る以外に見方がない、ということ了我々自身がまず自覚することである。その上で我々は外に対して次のようにはっきりと言わなければならない。「あなた方があなた方の見方で日本を見ることを我々は否定しない、と同時に、我々が我々の立場であなた方を見る権利を留保する。そして、そういうさまざまな見方を互いに認め合うことが、実は、相手を認めて話し合う前提なのだ」と。

127 興味深かったのは、私の報告が終わってからの質疑応答において、ドイツ人の質疑がこ
(16) の結びの言葉に集中したことである。紙幅の都合でその詳細に触れることは出来ないが、

西欧人の考え方は本質的に普遍主義的で、彼らには相対主義というものが畢竟理解出来ないのだということをいやというほど思い知らされた。

国際化が叫ばれる今日、我々の課題は、我々が西洋の普遍主義と如何に対決していくかということに尽きると思ったのである。

(言語文化学科 教授 ドイツ語・日本学)

[以下の独文の研究報告はOAG・ドイツ東洋文化研究協会が出版する“Ästhetik und Ästhetisierung in Japan - Referate des 3. Japanologentages der OAG in Tokyo” (『日本の美学—第三回OAG・ドイツ日本学会研究報告集』) にいずれ収録されるが、同協会の好意によりそれに先立ちここに掲載する許可を得た。]

Auswirkungen der “japanischen Ästhetik” auf die Wirtschaft und Politik im heutigen Japan

von Tanaka Satoshi

Nicht selten wird behauptet, daß es für einen Ausländer schwer, wenn nicht gar unmöglich sei, Japan und die Japaner zu verstehen. Diese Schwierigkeit im Umgang mit Japan kommt meiner Meinung nach daher, daß den meisten Ausländern die Grundlagen des japanischen Denkens, die Prinzipien, auf die der Japaner alles bezieht, unzugänglich sind.

Ich erinnere mich an folgende Episode : Im Flugzeug war ein Japaner mit einer älteren amerikanischen Dame ins Gespräch gekommen. Sie fragte ihn, welche Religion er habe. Als er antwortete, daß er sich zu keiner Religion bekenne, fragte ihn die Dame ganz erstaunt, nach welchen Kriterien er dann seine Kinder erziehe.

Heute läßt sich sagen, daß sich die Industrieländer des Westens von den einengenden Fesseln der Religion zum großen Teil befreit haben. Diese Befreiung war jedoch erst durch die Überwindung der Bibel und ihres strengen Monotheismus möglich. Sie unterscheidet sich damit grundlegend von der religiösen Unabhängigkeit des Japaners, zu der dieser auf direktem Wege über den Pantheismus gelangt ist. Dieser Unterschied ist wesentlich, auch wenn das Ergebnis gleich ist.

Dennoch wird niemand bestreiten, daß in der heutigen Lebensweise und Denkart des Europäers noch immer spürbar ist, wie sehr sein Denken durch christliches Gedankengut geprägt ist. Für ihn, der einen übernatürlichen und absoluten Gott über sich hat, bedeutet die Religion ein Kriterium oder ein Prinzip, das sich “hinter seiner Seele” befindet und ihn stützt. Was der Europäer unter der Religion versteht, ist also grundlegend verschieden von dem, was wir Japaner darunter verstehen. Für den Japaner bedeutet die Religion nichts weiter als “*Iwashi no atama mo shinjin kara*”, was soviel heißt wie : “Glauben läßt sich an alles”. Es ist daher mehr als verständlich, daß jene amerikanische Dame über den Japaner, der ihr völlig arglos mitgeteilt hatte, er habe keine Religion, in höchstem Maße entsetzt war und ihn für einen Menschen ohne Prinzipien hielt.

Man wird nun zu Recht die Frage stellen, wie die japanische Gesellschaft, die ja kein
 125 Übernatürliches und Absolutes kennt - mithin also eine Gesellschaft ohne “Kanon” ist
 (18) - trotz alledem in der Lage war, ein hohes Maß an gesellschaftlicher Ordnung

aufrechtzuerhalten. Es muß - logisch gesehen - ein gewisses Etwas gegeben haben, das sich "hinter der Seele" des Japaners befindet und ihn stützt. Was aber ist dieses Etwas? Meine Antwort auf diese Frage ist die, daß es unser ästhetisches Empfinden ist, was uns stützt. Man kann dieses Etwas auch, wenn man will, "japanische Ästhetik" bezeichnen.

Das Thema des diesjährigen Japanologentags lautet "Ästhetik und Ästhetisierung in Japan". Meinen Sie nicht auch, daß ein solches Thema eigentlich nur in bezug auf Japan möglich ist? Und wenn dies tatsächlich so ist, würde dies dann nicht gleichzeitig bedeuten, daß unter "Ästhetik" im Falle Japans etwas anderes zu verstehen ist?

Man hört und liest häufig den Ausdruck "*nihon no bigaku*". Übersetzt man diesen Begriff wortgetreu ins Deutsche, ergibt sich etwa wie "japanische Ästhetik". Mein Sprachgefühl aber sagt mir, daß eine solche Übersetzung einzig in Anführungszeichen möglich ist. Auch im Japanischen hört und liest man nur selten den Ausdruck "*doitsu no bigaku*" oder "*amerika no bigaku*", und hier ist, so glaube ich, eine Übersetzung wie "deutsche Ästhetik" oder "amerikanische Ästhetik", selbst wenn sie in Anführungszeichen steht, undenkbar. Dies alles kommt m. E. daher, daß - erstens es sich bei der Ästhetik um einen universellen Begriff handelt und sie deswegen nicht für jedes Land einzeln zu bestimmen ist; und zweitens - daß trotzdem eine stillschweigende Übereinkunft unter den Japanern und auch unter ausländischen Japankennern darüber besteht, daß der Schönheitsbegriff in Japan irgendwie anders ist als im Westen. Hinzu kommt noch, daß ein Japaner, wenn er das Wort "Ästhetik" im Zusammenhang mit Japan verwendet, unbewußt davon ausgeht, daß dabei von der Grundlage der Lebens- und Denkweise des Japaners die Rede ist.

Auf dem Gebiet der Ästhetik im westlichen Sinne bin ich ein Laie. Ich möchte heute deshalb spontan und ohne einen Anspruch auf Vollständigkeit über den Begriff der "japanischen Ästhetik" sprechen, wie ich ihn weiter oben schon kurz umrissen habe. Meine Darstellungsweise ist dabei weder konstruktivistisch noch diskursiv, sondern aufbauunabhängig und intuitiv. Auch dies ist ein Aspekt der "japanischen Ästhetik". . . .

I

Unsere anfängliche Fragestellung soll lauten: Warum hat der Japaner das Absolute nicht nötig, und wie kommt er in einer Gesellschaft, die keinen "Kanon" kennt, mit seinem Leben zurecht? Dafür gibt es folgende zwei Gründe:

Der erste ist in der geographischen Lage Japans zu sehen. Der zweite ergibt sich aus der Tatsache, daß Japan in seiner Gesamtheit schon immer etwas wie eine Dorfgemeinschaft bildete, in der die Menschen durch die gemeinsame Tätigkeit des Reisanbauens eng miteinander verbunden waren.

Japan ist vom Festland durch das “nicht enge Meer” getrennt. Es hatte schon immer Kontakt mit dem Festland, wodurch die Kultur und auch technische Errungenschaften von außen nach Japan eindringen konnten, aber es blieb davon befreit, von anderen Völkern militärisch erobert bzw. politisch beherrscht zu werden. Japan ist und bleibt daher von altersher ein Land. Die Folge davon ist, daß Japan eine Nation mit hoher Homogenität geworden ist. Japan ist ein Land soziokultureller Einheit, und seine Bewohner sind alle sozusagen “Gleichfühlende”. Ihre zwischenmenschlichen und gesellschaftlichen Beziehungen sind geprägt durch ein Gefühl des Vertrauens. Der Japaner ist daher immer bereit, Konflikte durch eine gegenseitige Verständigung zu lösen, ohne im Absoluten Zuflucht zu suchen.

Auch der Reisanbau, der sich in Japan bereits in der Frühzeit seiner Geschichte entwickelte, hat eine wichtige Rolle dabei gespielt, alles zu homogenisieren. Bekanntlich liegt Japan weder in einer kalten noch in einer heißen, sondern in einer gemäßigt warmen Klimazone. Man kann aber das Klima in unserem Land kaum als warm bezeichnen. Man findet in Japan alle Aspekte, wie sie für kalte und tropische Zonen typisch sind. Bald erleben wir ein Klima wie am Äquator, bald liegt der Schnee bei uns höher als in Sibirien. Bald haben wir eine so hohe Luftfeuchtigkeit wie im Dschungel von Borneo, und wenig später schon bläst wieder ein trockener Wind wie in einer Wüste. Dies alles wiederholt sich in fast regelmäßigen Abständen. Der Reisanbau in Japan muß aufgrund der obig beschriebenen Naturbedingungen mit einem sorgfältig ausgearbeiteten Plan im jeweiligen “Jetzt” durchgeführt werden, ob man will oder nicht, und zwar schnell und geschickt. Im März das Anlegen der Reisbeete, in der Regenzeit wird gepflanzt, noch vor dem Taifun müssen die Ähren Früchte tragen, und dann bei schönem Wetter im Herbst kommt die Ernte; dieser Ablauf läßt sich nicht ändern. Da es heißt, daß 85% der Bewohner Japans im Mittelalter Bauern waren, kann man sagen, daß damals fast alle Japaner zu jeder Jahresperiode gleichzeitig derselben Tätigkeit nachgingen.

Wenn jemand sich sagte: “Ich gehe meinen eigenen Weg”, dann mußte er mit Sicherheit verhungern oder aber von den Almosen der anderen leben. Und noch immer ist diese Gesellschaft eine Gesellschaft, in der Faule und Taugenichtse nicht leben können. Schwerfälligkeit bedeutet in diesem Lande Unfähigkeit. Infolgedessen muß man fleißig und - manchmal ja - auch gehetzt sein.

In Japan gibt es den Ausdruck “*tonari byakushō*” (wörtlich: Nachbar-Bauer). Dieser wird gebraucht für einen Bauer, der immer in der gleichen Weise arbeitet wie sein Nachbar. Er pflanzt Reis, wenn sich sein Nachbar an das Reispflanzen macht. Wenn sein Nachbar das Feld düngt, dann düngt er es auch. Wenn sein Nachbar erntet, tut er auch dasselbe.

123 Yamamoto Shichihei, einer der repräsentativsten Kulturkritiker Japans, sagt, daß
(20) die Landwirtschaft in Japan also in Art einer Kampagne durchgeführt wird, und er

nennt sie "Reisanbau in Kampagneart".

In Anbetracht dieser Verhaltensweise beklagen sogenannte "fortschrittliche" japanische Intellektuelle oft, daß es den Japanern an Selbständigkeit fehle. Dem möchte ich jedoch folgendes entgegenhalten : Es zeugt durchaus von Selbständigkeit, wenn man einen Nachbarn selbständig als Vorbild wählt, um genau das zu tun, was dieser tut. Schließlich ist es einem nicht möglich, den Nachbarn nachzuahmen, wenn man nicht die gleichen Fähigkeiten und die gleiche Geschicklichkeit wie dieser besitzt. Es bedeutet daher auch eine Selbständigkeit, wenn man danach strebt, die gleichen Fähigkeiten wie sein Nachbar zu gewinnen. Hinzufügend würde ich diese "fortschrittlichen" Intellektuellen fragen, ob sie noch nie auf die Idee gekommen sind, daß sie selbst letztlich auch *tonari byakushō* sind, wenn sie sich in allem an ihren Nachbarn Europa und Amerika orientieren ?!

Man darf hier also nicht vergessen, daß die Grundidee des "Reisanbaus in Kampagneart", eine Lebensweise des Japaners schlechthin, bei der Modernisierung Japans in der Meiji-Zeit und auch bei der erstaunlich rapiden Entwicklung der japanischen Wirtschaft in der Nachkriegszeit, worüber ich später noch sprechen werde, eine große Rolle gespielt hat.

Es muß wohl kaum erwähnt werden, daß ein hohes Maß an "Fleiß" und "Harmonie unter den Mitmenschen" bei diesem japanischen Modell des "Kampagne-Reisanbaus" eine wichtige Voraussetzung bildete. In dieser Gesellschaft mußten sich die Leute vor allem darum bemühen, die Harmonie mit ihren Mitmenschen aufrechtzuerhalten, um ihrer jeweilig natürlichen Umwelt entsprechend zusammenarbeiten zu können. Die Harmonie des Zusammenlebens war für den Japaner schon immer oberstes Gesetz. Der Japaner hatte daher eine künstliche Ordnung, einen "Kanon", nicht nötig.

Im folgenden möchte ich darauf eingehen, auf welche Weise man damals eine Besprechung durchgeführt hat, um zu einer gegenseitigen Verständigung zu kommen, wenn Konflikte innerhalb dieser Gesellschaft entstanden waren. Die Besprechung, *yoriai* (wörtlich etwa : Versammlung) genannt, lief in etwa auf folgende Weise ab : Die Leute, die an der Besprechung teilnahmen, äußerten der Reihe nach ihre Einstellung, ihre Meinung und ihre Gefühle. Es gab dabei weder Auseinandersetzungen noch Diskussionen zwischen den beiden Parteien, die zueinander im Gegensatz standen. Nachdem alle Teilnehmer ihre Gedanken und ihre Meinung dargelegt hatten, war die Besprechung aus. Einige Tage später wurde eine zweite Versammlung einberufen, und die Teilnehmer äußerten wie schon beim ersten Mal ihre Meinung. Dabei war jedoch zu beobachten, daß sich die Gegensätze zwischen den beiden streitenden Parteien schon deutlich verringert hatten. Indem man also eine Versammlung mehrmals durchführte, ließ sich der Gegensatz der beiden Kontrahenten allmählich überwinden. Man fand also eine Möglichkeit zur Verständigung, und schließlich kam man zu einer Übereinstim-

mung. Man gelangte also zu einem Beschluß, ohne ein einziges Mal diskutiert oder abgestimmt zu haben.

Da es bei dieser Vorgehensweise keine Konfrontation gibt, sind die Äußerungen der Teilnehmer als reine Vorbereitungsphase oder als Übergangsprozeß zu einem Beschluß zu sehen. Die Besprechung läßt also keinen entscheidenden und unheilbaren Riß unter den Leuten zurück, somit ist die Harmonie in der Gesellschaft beizubehalten.

Diese Art und Weise der Besprechung lebt heute noch in dem modernen Unternehmen Japans und auch in der Welt der Politik fort. Wenn sich bei einer Konferenz Widerspruch gegen einen Antrag erhebt, wird die Konferenz sofort abgebrochen. Dann werden die Vorverhandlungen außerhalb der Konferenz - hinter den Kulissen also - so lange geführt, bis der Antrag bei der nächsten Konferenz einstimmig angenommen wird.

In der Tat ist es den Japanern gleichgültig, wer recht hat und was richtig ist. Es ist ihnen wichtiger, Unstimmigkeiten zu vermeiden und Eintracht zu bewahren. Wesentlich ist vor allem, daß man möglichst schnell aus der unwürdigen Situation kleinlicher Reibereien herauskommt und zu "wa", zu innerer und äußerer Übereinstimmung gelangt oder zumindest zu gelangen versucht. Friedliches Zusammenleben steht für die Japaner im Vordergrund. Sie würden keinesfalls daran denken, auf Kosten der Harmonie ihre Meinung dem Partner gegenüber unverblümt auszudrücken. Sie glauben, daß Bemerkungen, die das eigene Ich zu sehr in den Vordergrund stellen, geschmacklos und "unästhetisch" seien. Harmonie ist für die Japaner eine moralische und ästhetische Forderung zugleich.

Daß man auf die Harmonie mit seinen Mitmenschen einen so großen Wert legt, hat mit dem Bewußtsein, stets von den anderen gesehen zu werden, zweifellos etwas zu tun. Man berichtet von einer alten Bäuerin, die zu ihrem Sohn, der vor dem Bauernhof mit seinem Freund plauderte, sagte: "Es ist ungehörig (*mittomonai*), was du da tust; du könntest von jemand im Dorfe gesehen werden. Nimm einen Besen und tue zumindest, als ob du fegen würdest." Auch wenn diese Episode ein extremes Beispiel darstellen mag, läßt sich sagen, daß mehr oder weniger bei jedem Japaner ein solcher Charakterzug zu beobachten ist. Es dürfte hier eher die Interpretation zutreffen, daß das Faulsein dem ästhetischen Bewußtsein des Japaners nicht entspricht, als diejenige, daß der Fleiß für ihn eine Tugend sei. Es geht natürlich etwas zu weit, daß man sich fleißig stellt, es ist aber auch falsch, die Äußerung der alten Frau als falsch oder hinterlistig zu bezeichnen. Es ist zwar richtig, daß sie nur auf das Äußere Wert legt, aber ich als Japaner gehe davon aus, daß ihre Äußerung einzig ihrem ästhetischen Bewußtsein entspringt. Man könnte hier sagen, daß der Fleiß für sie nicht eine Frage der Leistungsfähigkeit oder der Pflicht war, sondern daß es ihr einzig um das ästhetische Empfinden und um die Harmonie in der Gemeinschaft ging.

In unserer Gesellschaft, in der man auf Harmonie einen so großen Wert legt, sieht man Bemerkungen, die das eigene Ich in den Vordergrund stellen, als häßlich an. Der Japaner ist gegen jede Art von Selbstbehauptung empfindlich und versucht, sie soweit wie möglich zu vermeiden. Ich möchte hier ein charakteristisches Beispiel dafür anführen :

Auch die Liebe ist für den Japaner losgelöst von jeglicher Leidenschaft. Die durch den Geschlechtstrieb hervorgerufene Wollust ist für den Japaner nichts anderes als eine häßliche "Behauptung des Ichs". Die Japaner mußten also jede Art von "Unzucht", die Heirat eingeschlossen, ästhetisieren. So haben Mann und Frau in enger Zusammenarbeit nicht die Liebe selbst, sondern die Stimmung der Liebe, d.h. alle Dinge um die Liebe künstlerisch verschönert und stilisiert. Bei einer Lebensweise, in der das ästhetische Empfinden im Mittelpunkt steht, wird auch die Behauptung des Ichs anerkannt, wenn sie nur einen schönen Stil hat. Jede Art von Selbstsucht, Zügellosigkeit und auch Unzucht wird dadurch, daß ihr ein schöner Stil gegeben wird, davon befreit, moralisch beurteilt zu werden.

Es gibt wohl kein anderes Volk auf dieser Erde, das die Freudenviertel, nach westlicher Definition ein Ort des Ehebruchs, so ästhetisiert hat wie die Japaner. Bis hin zu dem Zeitpunkt, als westliche Ideen nach Japan einzuströmen begannen, wäre selbst der sittenstrengste Mann in Japan nicht auf den Gedanken gekommen, ein Bordell als etwas Unmoralisches zu betrachten. Man muß sagen, daß dies einzigartig in der Welt ist.

II

Wenn man über die Ästhetik in Japan spricht, muß man natürlich auch auf die japanische Kunst zu sprechen kommen.

Daß die Japaner, denen die zwischenmenschlichen Beziehungen sehr wichtig sind, dazu neigen, sich nach dem anderen zu richten, und daß sie folglich immer bemüht sind, bei der Ausrichtung ihres eigenen Lebensstils immer vorsichtig zu prüfen, wie der andere denkt und fühlt, habe ich bereits erwähnt. Diese Tendenz läßt sich auch in der japanischen Kunst beobachten. Man kann sagen, daß die japanische Kunst eng mit den zwischenmenschlichen Beziehungen verbunden ist, Beziehungen, bei denen die Sorge um das Dasein des anderen eine wichtige Rolle spielt und vordringlich im Bewußtsein vorhanden ist.

Was z.B. die Literatur betrifft, so beschäftigten sich die japanischen Schriftsteller – angefangen vom *Genji-Monogatari* bis hin zum Fernsehspiel von heute – fast ausschließlich mit gesellschaftlichen Problemen, die aus den Schwierigkeiten, wie sie

sich aus dem Wunsch nach einem harmonischen Zusammenleben ergeben, entstehen, oder aber mit dem inneren Konflikt des Menschen, der sich gezwungen sieht, den spezifischen Bedürfnissen der Gesellschaft zu entsprechen. Ich kenne in der Tat kaum ein literarisches Werk, in dem der Autor über den Menschen hinaus nach transzendenter Wahrheit strebt.

Was die Tatsache anbelangt, daß die japanische Kunst so eng mit zwischenmenschlichen Beziehungen verbunden ist, so läßt sich dasselbe nicht nur vom Thema, sondern auch von der Art und Weise der Herstellung eines Kunstwerks behaupten, und auch von dem Ort, an dem ein Kunstwerk geschaffen wurde. Die Literatur war in Japan bis Ende des Mittelalters hauptsächlich eine mündlich überlieferte Dichtung. Sie wurde rezitiert und war damit eine Kunst, die vor einem Publikum aufgeführt wurde. Das *Tanka* wiederum, das japanische Kurzgedicht, war ursprünglich eine Art gehobener Gesprächsform. Später entstand es meistens bei gesellschaftlichen Anlässen und wurde spontan aus der jeweiligen Situation oder Stimmung heraus geschaffen. Die auf diese Weise entstandenen Gedichte der Anwesenden wurden unmittelbar diskutiert. Auch *Cha-no-yu*, die Teezeremonie, ist nichts anderes als ein Ritus, bei dem Umgangsformen in künstlerische Gesten verwandelt werden. Genauso ist es bei *Ikebana*, dem Blumenstecken, das in der Muromachi-Zeit eine Form des gesellschaftlichen Umgangs war. Selbst die Malerei, bei der es sich eigentlich um eine Individualkunst handelt, wurde im alten Japan als Kollektivkunst, d.h. als Kunst des gesellschaftlichen Umgangs verstanden. Bei *Shigajuku*, einer Kombination von Malerei mit Dichtkunst, wurden z.B. Bilder in einer Art Salon ausgestellt, über die man dann diskutierte. Ein Dichter schrieb dann spontan seine Eindrücke in Versen auf die Bilder. Auch dies zeigt wiederum deutlich, daß sich die japanische Kunst entwickelt, indem sie unmittelbar aus den zwischenmenschlichen Beziehungen entsteht und diese zum zentralen Thema hat.

Im Westen gibt es die Auffassung, daß der Künstler ein einsames Wesen ist. Dies kommt m.E. daher, daß dort die Meinung vertreten wird, es sei Aufgabe des Künstlers, die transzendente Wahrheit zu erforschen, die über den Menschen hinausgeht. Dem Künstler kommt somit eine ähnliche Rolle zu wie dem Wissenschaftler und dem Philosophen, die beide nach der Wahrheit streben. Einzig die Art und Weise der Forschung ist verschieden. Damit muß sich der Künstler unter all den gewöhnlichen Menschen, die nur an ihr augenblickliches Glück denken und einzig ihren Neigungen nachgehen, notgedrungen einsam fühlen. Diese Vorstellung aber von der Einsamkeit des Künstlers war in der Geschichte der japanischen Kunstanschauung niemals zu beobachten. Im Gegenteil. In Japan ist und war schon immer die Vorstellung gültig, daß auch der Künstler einbezogen ist in das Geflecht der alltäglichen zwischenmenschlichen Beziehungen und er ein Mensch wie jeder andere ist.

das Ki no Tsurayuki zugeschrieben wird, ist die erste literarische Abhandlung in unserem Land. Donald Keen, der amerikanische Japanologe, schreibt in seinem Buch "Japanese Literature - An Introduction for Western Readers", daß er bei der Lektüre des *Kanajo* seltsam berührt war. Tsurayuki argumentiert darin, daß das japanische Gedicht einzig und allein aus dem Herzen des Dichters entstehe, ohne daß dabei Transzendentes oder Übersinnliches unbewußt eine Rolle spielt. Ferner behauptet Tsurayuki, daß der Dichter nicht nur das Herz des Anderen zu rühren vermag, sondern er auch die Fähigkeit besitzt, sogar "Geister und Gottheiten" zu beeinflussen. Donald Keen ist der Meinung, daß der Gedanke des *Kanajo* in einem grundlegenden Gegensatz zur traditionellen westlichen Ästhetik stehe. Denn in der abendländischen Ästhetik herrscht nämlich, wie bereits erwähnt, die Auffassung vor, daß alle Künste auf dem "Logos" eines Gottes und auf der "Idea" der Welt begründet sind und daß Gott als übernatürliches Wesen sich durch den Dichter äußert, dieser also nur ein Medium ist, das von Gott inspiriert ist. Für uns ist es heute selbstverständlich, daß das menschliche Herz das Gedicht bedingt. Der Gedanke aber, daß die Quelle dichterischen Schaffens **ausschließlich** Herz und Seele des Dichters sein sollen, muß von westlicher Sicht aus befremdend wirken, geschweige denn der Gedanke, daß das, was aus dem menschlichen Herzen entstanden ist, das übernatürliche Wesen beeinflusst. Für uns Japaner hat es nie eine andere Wahrheit gegeben als die, daß Kunst ausschließlich ein Ausdruck des **Menschen** ist. Es ist dies eine Ästhetik ohne Gott . . .

Nach westlicher Kunstauffassung wird die Übermittlung eines subjektiven Ausdrucks nahezu vollkommen ignoriert. Wenn man hinter dem Ausdruck Übersinnliches vermutet, spielt es keine Rolle, ob eine Kommunikation stattfindet oder ob man von anderen verstanden wird. Oder anders gesagt : der Ausdruck ist in der westlichen Ästhetik nicht eine Aktion zwischen zwei Personen. Der Ausdruck ist grundsätzlich unabhängig von einem Partner. Ausdruck bedeutet, daß Übersinnliches im Spiel ist. Und wenn dem so ist, ist selbstverständlich, daß Ausdruck von jedem verstanden wird. Tsurayuki hingegen geht es eher darum, Geister und Götter, Krieger und Liebende durch seine Gedichte zu bewegen - der einzige Maßstab, an dem gemessen werden kann, ob ein Ausdruck dem poetischen Sinn entsprechend ausgewählt wurde. Das Verhältnis zwischen Dichter und Leser steht über allem. Kommunikation und Verständnis sind dabei wesentlich.

Die japanische Kunst ist im Grunde also eine gesellschaftliche Kunst, in der zwischenmenschliche Beziehungen in vielfacher Hinsicht eine Rolle spielen. Diese Tatsache verleiht ihr einen widersprüchlichen, paradoxen Charakter.

Zwischenmenschliche Beziehungen konfrontieren den Menschen in der Tat mit schwierigen Fragen. Sie schließen die Aufnahme subjektiven Ausdrucks nicht aus. Wenn dieser aber vornehmlich der Selbstdarstellung dient, löst er in uns ein starkes Gefühl der Abneigung aus. Der Charakter der japanischen Kunst läßt sich also wie folgt

definieren : Aufdringlichkeit muß unbedingt gemieden werden. Kunst darf nicht zur bloßen Selbstdarstellung des Künstlers werden.

Der japanische Künstler befindet sich somit in einer Art Dilemma, weil er einerseits den Drang verspürt, seine Absicht klar auszudrücken, er andererseits sich aber stets verpflichtet fühlt, an den Rezipienten zu denken, dem es mißfällt, wenn die Absicht des Künstlers allzu deutlich hervortritt. So entsteht in der japanischen Kunst ein Schönheitsideal, das auf Äußerlichkeiten und Brillanz verzichtet. Begriffe wie "wabi" und "yūgen" sind zweifellos Ausdruck dieses ästhetischen Ideals.

"Wabi" ist ein japanischer Kulturbegriff, der Anspruchslosigkeit, d.h. Verzicht auf Pracht und Aufwand bedeutet. Eine bekannte Bemerkung, die Murata Shuko, dem Begründer des *wabi-cha*, zugeschrieben wird, lautet : "*Tsuki mo kumoma no naki wa iyanite sōrō*" (Den Mond ohne Wolken, die an ihm vorüberziehen, mag ich nicht) . Der Mond wird also von uns nur als schön empfunden, wenn er teilweise von einer Wolke verdeckt ist. Diese Betonung des Schönen durch anscheinend Gegensätzliches ist "yūgen" .

"Wabi" und "yūgen" erklären daher auch die Vorliebe des Japaners für Asymetrie und Deformation, kurz für alles, was unvollständig und unregelmäßig ist. Es versteht sich dabei von selbst, daß auch "wabi", "yūgen", Asymetrie und Deformation als aufdringlich und daher unschön empfunden werden, wenn sie zu stark in den Vordergrund treten.

Ich habe bereits erwähnt, daß die japanische Gesellschaft eine in hohem Grad homogene Gesellschaft - oder anders ausgedrückt - eine Art Gemeinschaft ist, deren Mitglieder alle Gleichgesinnte sind. In dieser Gesellschaft besteht ein sozusagen selbstverständliches Einvernehmen, das auf natürliche Weise zustandekommt, ohne daß man darüber viel sprechen muß. Das ist wohl auch einer der Gründe dafür, daß der Japaner jede aufdringliche Selbstbehauptung und Selbstdarstellung als häßlich empfindet und daß er ungeschickt ist, seine Meinung auszudrücken. In einer solchen Gesellschaft sind Beredsamkeit und Aufdringlichkeit auch in der Kunst fehl am Platz. Es genügt, wenn Kunst andeutet, denn dort, wo ein natürlicher Konsensus besteht, herrscht ein stillschweigendes Verständnis. So haben die Japaner einen unverwechselbaren Ausdruck in der Kunst geschaffen, bei dem Konzentration und Andeutung die entscheidenden Komponenten sind : *Haiku*, das kürzeste Gedicht in der Welt, und *Sumie*, die Tuschkmalerei, bei der die leere Fläche eine wichtige Rolle spielt. Man muß sagen, daß der Kunstausdruck in Andeutungen, eine "Andeutungskunst" also, die Spezialität des Japaners ist.

117 Ein anderes Element, das die japanische Kultur und Kunst charakterisiert, ist die
(26) Tatsache, daß sie sich seit alters her stets unter dem Einfluß fremder Kulturen entwickelt hat, deren Ideen und Konzepte sie übernommen und in die eigenen Vorstel-

lungen integriert hat. Man kann sagen, daß die japanische Kultur grundsätzlich eine Kultur der Anpassung ist, eine Kultur der Übernahme und der Umformung. Sie ist besonders empfänglich für Reize aus der sie umgebenden Welt, sie reagiert leicht und nachhaltig auf Einflüsse fremder Kulturen und ist fähig, sich jedweder Situation anzupassen. Dieser Anpassungsprozeß verläuft stets ohne festen Plan, wobei der Japaner sich auch leicht über anscheinend logische Widersprüche hinwegzusetzen weiß. Daher wirkt, geschichtlich gesehen, die Entwicklung der japanischen Kunst uneinheitlich. Man kann sich des Eindrucks nicht erwehren, daß sie, je nach Zeitalter, stets von allen möglichen anderen Strömungen beeinflusst wurde oder manchmal auch ganz zufällig entstanden ist.

Der brasilianische Kunstkritiker Mario Pedrosa sagt, die japanischen Kunststile würden jeweils durch Situationen bestimmt. Seiner Meinung nach läßt sich sogar die Behauptung aufstellen, daß die japanische Kunst keine ausgesprochenen Stile kenne und ihrem jeweiligen Einfluß entsprechend formbar sei. Ich bin mit ihm ganz einer Meinung. Mit Recht sagt er auch, der Japaner gehe stets von einer ihm gegebenen Situation aus. Voraussicht sei ihm fremd. Er lebe ganz im Jetzt und in der Gegenwart. Auch hier kann ich seiner Auffassung nur beipflichten. Wir Japaner leben in der Gegenwart. Wir haben traditionell die Lebensphilosophie, Vergangenes vergangen sein zu lassen. Und eben diese Haltung kann, so glaube ich, den ausgeprägten Wirklichkeits-sinn und die pragmatische Einstellung des Japaners erklären.

Der japanischen Kultur, die sich durch die Übernahme fremder Kulturen entwickelt hat, und die folglich kulturelle Konflikte und Auseinandersetzung nicht kennt; fehlt es an Kontinuität. Künstlerische Gegenströmungen, die im Westen zum charakterisierenden Stil einer bestimmten Epoche geworden wären, formen bei uns keinen "Stil", sondern stellen sich als neue Kunstgattung ohne Schwierigkeiten neben die schon bestehenden. So lassen sich in Japan selbst widersprüchliche Dinge im allgemeinen problemlos verknüpfen.

Die Relativierung des Wertbegriffs und die damit verbundene Vorstellung der Austauschbarkeit und Auswechselbarkeit der Ereignisse und Erscheinungsformen erklärt die Bedeutung des verbindenden und verbindlichen "Sowohl-als-Auch", eines Denkprinzips, das in der japanischen Mentalität eine so große Rolle spielt und vielen Menschen aus dem Westen oft unüberwindliche Schwierigkeiten bereitet. Dieses japanische "Sowohl-als-Auch", das dem westlichen "Entweder-Oder" diametral gegenübersteht, ist nicht nur ein Schlüssel zum Verständnis der japanischen Kultur, sondern erklärt auch viele Dinge des täglichen Lebens in unserem Land.

In meinen bisherigen Ausführungen habe ich versucht, eingehend das ästhetische Empfinden des Japaners zu erklären. Wirft man aber einen Blick auf die Wohnungen und das Erscheinungsbild der Städte in Japan, wird man nur schwer behaupten können,

daß diese in irgendeiner Weise "schön" sind. Man wird sich vielmehr fragen müssen, ob man überhaupt behaupten kann, daß der Japaner empfänglich für das Schöne ist. Dieser Frage möchte ich folgendes entgegenhalten : In der Welt des Japaners, die das übernatürliche Absolute, das sich außerhalb unserer Welt der Relativität befindet, nicht kennt, ist alles für ihn relativ, und die Welt ist für ihn flach. Die Folge davon ist, daß es ihm nicht möglich ist, Beziehungen räumlich zu sehen, oder anders ausgedrückt, die Zusammenhänge zu erkennen. Infolgedessen reicht seine ästhetische Aufmerksamkeit zwar tief in einzelne Dinge hinein, aber sie wird stumm vor dem Ganzen. In diesem Sinn ist an der Behauptung, daß es außer dem japanischen kein anderes Volk auf der Erde gibt, das schönen Dingen gegenüber so aufgeschlossen und häßlichen Dingen gegenüber so gleichgültig ist wie das unsrige, durchaus etwas Wahres.

III

Im folgenden möchte ich auf die Wirtschaft und Politik Japans zu sprechen kommen.

Man sagt, daß Japan eine wirtschaftliche Großmacht ist. Wenn man aber die Wirtschaft Japans genauer betrachtet, ist festzustellen, daß diese Behauptung einzig auf dem Gebiet der Massenproduktion von genormten Waren, wie z.B. in der Automobil- und Elektroindustrie, Gültigkeit hat. Diese Tatsache ist aber vielsagend.

Es heißt, daß die Prinzipien des Managements nach japanischem Stil auf folgenden drei Voraussetzungen basieren : 1. Lebenslange Anstellung, 2. Gruppenbezogenheit, und 3. ein ausgeprägter Charakter der Gemeinschaft. Diese Unternehmensführung nach japanischem Stil führte vor allem in der Massenproduktionsindustrie der normierten Produkte zu merkwürdigen Ergebnissen. – Die Gründe dafür möchte ich später darlegen. – Das, was ich hier betonen möchte, ist, daß die oben definierten Charakterzüge des japanischen Managements nichts anderes sind als die kennzeichnenden Elemente der Dorfgemeinschaft, wie sie für den Reisanbau erforderlich sind. Mit anderen Worten : die sogenannte "Ästhetik" der zwischenmenschlichen Beziehungen, wie sie in jener unserer Dorfgemeinschaft gepflegt wurden, erweisen sich auch in der Industrie, und dort vor allem bei der Massenherstellung genormter Produkte, von großem Vorteil.

Selbstverständlich handelt es sich bei einem Unternehmen um eine Gesellschaft, die sich das Ziel setzt, Gewinne zu machen. Da in Japan das harmonische Zusammenleben der Menschen in der Gesellschaft oberstes Gesetz ist, weist ein Unternehmen als eine Gruppe von Menschen eine Doppelstruktur auf : es ist eine Gesellschaft und eine Gemeinschaft zugleich ; oder anders ausgedrückt, in Japan kann eine Gesellschaft erst funktionieren, wenn sie sich in eine Gemeinschaft verwandelt.

keineswegs einen Arbeitsvertrag ab, der eine Anstellung auf Lebenszeit garantiert. Falls jemand einen solchen Vertrag von seinem Arbeitgeber fordern sollte, würde er mit aller Wahrscheinlichkeit keine Anstellung in dieser Firma finden. In eine Firma einzutreten heißt in Japan, daß man Mitglied einer Gemeinschaft wird. Dies bedeutet, daß man auf Lebenszeit in der Gemeinschaft bleibt, oder bleiben kann, solange man aus ihr nicht verwiesen wird. Und weil der Eintritt in eine Gemeinschaft nicht auf der Basis eines Arbeitsvertrag erfolgt, kann von einem Vertrag auf Lebenszeit keine Rede sein.

Das japanische Management, das durch die lebenslange Anstellung, die Gruppenbezogenheit und den gemeinschaftlichen Charakter des Unternehmens gekennzeichnet ist, vergrößert die Loyalität der Arbeitnehmer der Firma gegenüber und verstärkt ihr Bewußtsein, einer bestimmten Firma anzugehören. Unter solchen Voraussetzungen wird Selbstaufopferung als *bitoku* (wörtlich : "schöne" Tugend) angesehen.

Da in japanischen Unternehmen auch die Untergeordneten ein Entscheidungsrecht haben, dauert es zwar lange, bis die Firma zu einer Entscheidung in einer bestimmten Angelegenheit gelangt, aber wenn einmal eine Entscheidung getroffen ist, dringt das, was entschieden wurde, in der Firma bis in alle Stellen vor - eine Gewähr dafür, daß die Firma mit der vollkommenen Kooperation der gesamten Belegschaft rechnen kann. Dies ist letztlich auch der Grund dafür, daß es in Japan möglich ist, Arbeitgeber und Arbeitnehmer in ihren Anstrengungen zu vereinen, technische Hochleistungen und eine ständige Optimierung der Betriebe zu erzielen. Dieses Prinzip hatte gerade bei der Massenproduktion von genormten Produktion seinen größten Erfolg, weil in diesem Industriezweig relativ wenige Entscheidungen erforderlich sind. So haben die japanische Transistorindustrie und auch die Automobilindustrie erst dann ihre höchste Produktivität und Konkurrenzfähigkeit gewonnen, nachdem eine Massenproduktion möglich geworden war. In der Zeit, als Computer noch riesige Geräte waren und nur in geringen Mengen und wenigen Modellen produziert wurden, lag die Computerindustrie Japans weit hinter den USA zurück. Erst als die Computer immer kleiner und eine Massenproduktion möglich geworden war, hat Japan die USA überholt. In Industriezweigen aber, wo rasche Entscheidungen und ein hohes Maß an Kreativität erforderlich sind, wo Produkte nur in kleinen Mengen und in zahlreichen Modellen hergestellt werden wie z.B. in der Flugzeugindustrie, spielt Japan nur eine untergeordnete Rolle. In diesen Industriezweigen wirkt sich die Starrheit der Beschäftigung auf Lebenszeit und die Gruppenbezogenheit, die auf der Ästhetik der zwischenmenschlichen Beziehungen beruht, eher negativ aus.

Es heißt, daß das Geheimnis der hohen Konkurrenzfähigkeit der japanischen Industrieerzeugnisse auch darin liegt, daß sie in ihrem Detail vortrefflich sind. Die subtile Aufmerksamkeit des Japaners selbst kleinsten Einzelheiten gegenüber ist zweifellos ein Ausdruck des oben beschriebenen ästhetischen Gefühls des Japaners, doch wenn

dieses zu weit getrieben wird, kann es umgekehrt dazu kommen, daß man zu sehr an den Einzelheiten hängen bleibt, die mit der eigentlichen Funktion des Produkts gar nichts mehr zu tun haben. Wenn man auf die Details einen zu großen Wert legt, kann es geschehen, daß man den Überblick über das große Ganze verliert. Aus diesem Grund ist auch verständlich, daß die optimale Situation wohl die ist, daß Japaner ein Modell in seiner Ganzheit aus dem Ausland übernehmen und dann die Einzelheiten - mit ihrem sprichwörtlichen Fleiß und großer Akribie - ihrem ästhetischen Empfinden entsprechend be- und verarbeiten. Auf diese Weise kommen dann hervorragende Erzeugnisse zustande.

Hinzu kommt noch, daß Japaner jederzeit bereit sind, die Wünsche der Kunden in Betracht zu ziehen und unmittelbar darauf zu reagieren. Auch dies ist nichts anderes als eine Folge der "japanischen Ästhetik", bei der die Einstellung im Mittelpunkt steht, sich stets nach dem anderen zu richten - der einzige Maßstab, an dem sich messen läßt, ob eine Ware ihrem wirtschaftlichen Sinne entsprechend ausgewählt wurde. Das Verhältnis zwischen Hersteller und Kunden ist wichtiger als jeder andere Aspekt. Kommunikation und Verständnis sind wesentlich. Mit dieser "Ästhetik" ist es Japan gelungen, aufnahmebereite Märkte für seine Waren im Ausland zu finden.

Japan hat sich seit der Meiji-Zeit im Bereich der Entwicklung moderner Technologie am Westen orientiert und sich zu einer der führenden Industrienationen der Welt entwickelt. Es ist aber nicht nur Japan, das sich im 19. Jahrhundert mit der modernen Technologie und dem modernen sozialen System im Westen auseinandergesetzt hat: auch andere Länder des Ostens gehören dazu. Niemand wird nämlich bestreiten, daß die Türkei, Persien, Indien und China schon viel früher als Japan und in viel stärkerem Ausmaß mit der modernen Zivilisation des Westens in Kontakt gekommen sind. Dabei stellt sich unweigerlich die Frage, warum es allein Japan gelungen ist, eine moderne industrielle Gesellschaft zu schaffen. Eine Antwort läßt sich meiner Meinung nach wie folgt formulieren: Japan hat eine Tradition, fremde Kulturwerte aktiv aufzunehmen und sie zu assimilieren. Japaner haben niemals einen gegen die Aufnahme fremden Kulturguts gerichteten Widerstand verspürt. Und dies wiederum ist m.E. darauf zurückzuführen, daß unsere Gesellschaft keinen "Kanon" im eigentlichen Sinne des Wortes hat.

Als der Buddhismus nach Japan kam, hat Shōtoku-taishi eine Logik geschaffen, die man geradezu als Sophisterei bezeichnen könnte: "Indem wir an dem Stamm des Schintoismus die Äste des Buddhismus und die Zweige des Konfuzianismus wachsen lassen, werden wir ein wahres Gedeihen hervorbringen." Diese Einstellung Shōtoku-taishis gegenüber der Religion hat einen entscheidenden und nachhaltigen Einfluß auf die Denk- und Lebensweise des Japaners in den späteren Zeiten ausgeübt, und zwar bis in die heutige Zeit hinein. Seither ist es den Japanern möglich, jede fremde Kultur

aufzunehmen, ohne durch das eigene Bekenntnis bedingt zu werden. Hinzu kommt, daß die Japaner es sich zur Regel gemacht haben, von anderen Kulturen nur das aufzunehmen, was ihnen gefällt oder was ihnen zu passen scheint, ohne den jeweiligen Hintergrund dieser Kultur zu berücksichtigen. Eine negative Folge war jedoch, daß den Japanern dabei die Fähigkeit verlorengegangen ist, Kultur als einen Organismus, der als Ganze eine Einheit darstellt, zu erfassen.

Das Grundprinzip des Japaners, der an mehrere Religionen gleichzeitig glauben kann (wobei fraglich ist, ob dies eigentlich noch als Glaube bezeichnet werden kann), findet seinen höchsten Ausdruck in der "Meinung von allen", oder, wie bereits wiederholt gesagt wurde, in der "Harmonie unter den Mitmenschen" und damit in der "Ästhetik", Worte und Taten, die sich der Strömung der Mehrzahl in der Gemeinschaft widersetzen, häßlich zu finden. Die Folge dieses Denkens ist, daß Japan zu einem Land des Pragmatismus geworden ist; in dem die Gerechtigkeit jeweils dem Interesse aller entsprechend reguliert werden kann.

Es wird häufig die Behauptung aufgestellt, daß dem Japaner das Bewußtsein des Individuums fehlt. Diese Behauptung ist aber falsch. Der Unterschied liegt einzig darin, daß der Inhalt des Bewußtseins des Individuums und die Art und Weise des Begreifens der Beziehung zwischen dem Individuum und der Gesellschaft anders sind als im Westen.

Dies befähigt den Japaner, aus fremden Kulturen zu lernen. Vor allem im Bereich der Technik hat diese Fähigkeit dem japanischen Volk großen Nutzen gebracht. Jedes Mal, wenn die Japaner eine Technik aus dem Ausland eingeführt hatten, waren sie in der Lage, ihre Lehrer in 40 Jahren zu überholen. Dies läßt sich nicht nur von der Auto- und Elektronikindustrie Japans nach dem zweiten Weltkrieg sagen - es war auch in allen anderen Bereichen schon immer so.

Japaner verfahren in der Weise, daß sie eine fremde Technik in einer sehr effizienten Weise erlernen, indem sie nämlich eine "dead-copy" des ausländischen Produkts machen. Durch die Herstellung einer "dead-copy" eignet man sich nämlich nicht nur die technischen Aspekte eines Produkts an, sondern entdeckt dabei auch die Fehler dieses Produkts. Sie verbessern dann die Fehler und fügen dem Produkt Originelles hinzu. Auf diese Weise hat sich Japan innerhalb kürzester Zeit zu einem der führenden Industrieländer in der Welt entwickelt.

Daß die Türkei, Indien und China, die alle viel früher als Japan mit der modernen westlichen Zivilisation in Berührung gekommen waren, bei deren Aufnahme und Verbreitung hinter Japan zurückblieben, kommt daher, daß sie nicht den Weg gewählt haben, eine "dead-copy" zu machen. Da jedes dieser Länder seinen eigenen "Kanon" besitzt, müssen sie, wenn sie sich mit einer fremden Theorie, Technik oder einem anderen System auseinandersetzen, darauf achten, ob der Gedanke, der diesen zugrunde liegt, ihrem "Kanon" entspricht. Außerdem kommen die Menschen in diesen

Ländern, die ihr eigenes Kultursystem geschaffen haben und wohl wissen, daß Kultur ein Organismus ist, der als Ganzes eine Einheit bildet, niemals auf die Idee, eine bestimmte Technik unabhängig von ihrem Hintergrund herauszupflücken. Sie stellen sich vielmehr die Frage, ob der dahintersteckende Gedanke von ihrer Gesellschaft anerkannt werden kann oder nicht, und sie versuchen, wenn sich die Aufnahme einer bestimmten Technologie als notwendig erweist, sie so lange zu deformieren oder abzuändern, bis sie ihren eigenen Vorstellungen und ihrer Gesellschaft entspricht. Kurz : Sie kämen nie auf die Idee, eine "dead-copy" zu machen.

Dies erinnert an China nach dem Opiumkrieg, also an die Zeit etwa 20 Jahre vor der Meiji-Restauration in Japan. In China, das bei dem Krieg den gewaltigen Impakt der modernen Militärtechnik Englands erfuhr, wurde nach Beendigung des Krieges die Meinung vorgebracht, man solle so intensiv wie möglich moderne Technik einführen, um die Industrie auszubauen und das Land für einen modernen Krieg zu rüsten. Dabei kam es zu heftigen Diskussionen, welcher Grundgedanke es sei, der diese moderne Technik hervorgebracht hat. Dies entwickelte sich weiter zu der Frage : "Was wird aus unserer Politik und unserer Gesellschaft werden, wenn wir diese Technik aufnehmen?" In der Zeit von ca. 1820 bis Anfang des 20. Jahrhunderts sind zahlreiche Abhandlungen geschrieben worden, die sich mit dieser Problematik beschäftigen.

In Japan hingegen sind solche Fragen kaum diskutiert worden. Die Japaner, die keinen "Kanon" besitzen und denen die Gewohnheit fremd ist, Kultur als einen Organismus zu erfassen, kamen nie auf die Idee zu fragen, welcher Gedanke und welche geschichtliche Voraussetzung hinter einer bestimmten Technologie stecken. Deshalb sind sie auch imstande, von einem Produkt eine "dead-copy" anzufertigen und von den westlichen Kulturwerten jeweils nur das Wichtige einzuführen.

Nicht selten lese ich in Abhandlungen, die von westlichen Wissenschaftlern geschrieben wurden und die die Entwicklung der japanischen Wirtschaft von heute zu analysieren versuchen, daß Japans Ziel es sei, mittels eines sorgfältig ausgearbeiteten Plans Angriffe auf den Westen zu tätigen. Vom westlichen Gesichtspunkt aus gesehen mag dies sicher so erscheinen. Tatsache ist aber, daß die Entwicklung der modernen japanischen Wirtschaft eine zufällige Folge davon war, daß sich die Japaner, traditionsgemäß sozusagen, der jeweiligen Situation entsprechend ein augenblickliches und kurzfristiges Ziel gesetzt und sich zur Erreichung desselben aufs äußerste angestrengt haben. Selbst die Japaner sind erstaunt über das unerwartete Ergebnis und stehen ratlos vor ihren Erfolgen.

111 Oft heißt es, die Japaner würden sich bemühen, die westliche Zivilisation einzuholen
(32) oder gar zu überholen. Hier muß jedoch darauf hingewiesen werden, daß in Japan niemals eine solche Parole aufgestellt worden ist. Weder hat jemand einen genauen Plan dafür entworfen, noch hat die Regierung das Volk dazu aufgerufen. Die Entwick-

lung hat sich vielmehr auf ganz natürliche Weise vollzogen . . .

Auf jeden Fall hat sich das Prinzip einer Gesellschaft ohne "Kanon" und die daraus entstehende Ästhetik des Japaners zumindest bis zum jetzigen Zeitpunkt günstig für die Entwicklung der Wirtschaft ausgewirkt. Aber in der Politik, vor allem in der Außenpolitik, kann davon nicht gerade die Rede sein.

IV

Mit der Kulturerneuerung in der Meiji-Zeit hat Japan ein modernes politisches System westlicher Prägung, und nach dem Zweiten Weltkrieg die Demokratie eingeführt. Betrachtet man aber eine Plenarsitzung oder eine Sitzung in anderen Ausschüssen im japanischen Parlament, wird man sich fragen, ob es sich dort wirklich um ein Forum der freien und demokratischen Meinungsäußerung handelt. Wie oben bereits erwähnt, sind eine echte Diskussion oder auch ein Dialog im herkömmlichen Sinn in der japanischen Gesellschaft kaum möglich. In Japan kommt folglich eine Diskussion in der Öffentlichkeit nichts anderem als einer Zeremonie oder einem Schauspiel gleich, und die eigentliche Diskussion, wenn man sie denn so nennen will, wird außerhalb der Ausschüsse auf einer quasi privaten Ebene geführt, und zwar in einer Weise, wie wir sie bereits aus der früheren "yoriai" kennen. Man kann also sagen, daß in Japan ein politisches System moderner Prägung und das traditionelle japanische System nebeneinander existieren.

In Japan, wo die Ästhetik der Harmonie als oberstes Gesetz angesehen wird, versucht man so weit wie möglich zu vermeiden, eine Sache nach dem Mehrheitsprinzip zu entscheiden, nach einem Prinzip also, das das grundsätzliche Element der Demokratie bildet. Es gibt wohl kein anderes Land als Japan, in dem die größte Partei die Meinungen der Minderheitsparteien so stark in Betracht zieht. Vor allem wenn es um einen wichtigen Gesetzentwurf geht, wird die öffentliche Beratung häufig um mehrere Monate aufgeschoben, bis die Regierungspartei den Konsensus der Oppositionsparteien erreicht hat. In dieser Zeit werden die Vorbesprechungen mit der Opposition außerhalb der Ausschüsse abgehalten, bis man zu einem stillschweigenden Einverständnis gekommen ist. Wenn sich trotzdem kein Kompromiß finden läßt und die Oppositionsparteien unerbittlich Widerstand leisten, indem sie z.B. gemeinsame Beratungen ablehnen, muß der Gesetzentwurf weitgehend revidiert werden. Manchmal kommt es sogar dazu, daß die Regierung den Entwurf zurückziehen muß, und dies trotz einer absoluten Mehrheit der Regierungspartei ! Im Falle, daß die Regierung den Gesetzentwurf unter Hinweis auf die Stimmenmehrheit durchzubringen versucht, gehen die Oppositionsparteien davon aus, daß sie das Recht haben, den Entwurf mit Gewalt zu verhindern.

Was in Japan von einem Leiter, sei es in einem Unternehmen oder in der Politik,

verlangt wird, ist nicht "leadership", sondern die Fähigkeit, Unstimmigkeiten aus dem Weg zu räumen.

Die Liberal-Demokratische Partei, die derzeitige Regierungspartei in Japan, ist, vom westlichen Standpunkt her gesehen, wohl keine Partei. Sie ist eine Gruppe, in der Mitglieder verschiedenster politischer Einstellungen nur in den Punkten übereinstimmen, ein freies Unternehmenssystem aufrechtzuerhalten. Diese Politiker gliedern sich in mehrere kleinere Gruppen, die sogenannten "*habatsu*" oder Cliquen, bei denen es sich nicht so sehr um einen Zusammenschluß politisch Gleichgesinnter als vielmehr um eine Ansammlung von Freunden handelt, die ihrem Boß in jeder Hinsicht ergeben sind. Die Bosse sind sowohl im Parlament als auch in der Partei sehr einflußreich und unterstützen ihre Anhänger im Wahlkampf mit Geld. Da die Liberal-Demokratische Partei, die ja schon sehr lange an der Regierung ist, von den großen Unternehmen für ihre politischen Aktivitäten finanziell stark unterstützt werden, ist es nicht zu vermeiden, daß diese Partei und die Großunternehmen immer mehr miteinander und ineinander verwachsen sind. Infolgedessen kommt es nicht selten zu Korruptions- und Bestechungsaffären, mit denen sich die Massenmedien dann jedesmal mit Vorliebe beschäftigen.

In der japanischen Gesellschaft, in der man auf zwischenmenschliche Beziehungen großen Wert legt, findet sich seit alters her die Gewohnheit, zu verschiedenen Anlässen wie z.B. bei einer Hochzeit, bei einem Begräbnis, wenn sich jemand an einen mit der Bitte um Hilfe wendet, und nicht zuletzt als Zeichen als Dankbarkeit, Geld oder Sachen zu schenken. Für uns Japaner sind Geschenke also eine Art Kommunikationsmittel. Dies gilt sowohl für die Ebene des privaten Lebens als auch im Bereich der Unternehmen und der Politik. Auch die Massenmedien bilden in diesem Punkt keine Ausnahme.

In unserer Gesellschaft ohne "Kanon" gibt es deshalb etwas wie ein "Gesetz außerhalb des Gesetzes" oder ein "Recht außerhalb des Rechts". Dies bedeutet in etwa : ein Gesetz bestimmt nur einen provisorischen, annähernden Rahmen. Es besteht ein stillschweigendes Einverständnis, daß man diesen Rahmen bis zu einem gewissen Grad überschreiten darf.

Ein Gesetz ist eine künstliche Ordnung. Es versteht sich daher von selbst, daß dem Japaner, der in einer Gesellschaft lebt, die eine künstliche Ordnung nicht nötig hat, das Gefühl für ein Gesetz fehlt. Dies erklärt zum Teil auch die Tatsache, daß, wie Ausländer oft sagen, dem Japaner der Begriff des Vertrags fremd ist. Wenn jemand in Japan unter Berufung auf einen Vertrag bestimmte Forderungen stellt und sein ganzes Handeln nach dem Vertrag ausrichtet, wird man ihm schnell den Vorwurf machen, er verhalte sich "unmenschlich".

Für uns Japaner gibt es - sei es ein Gesetz oder ein Vertrag - eine "bestimmte" Zulassungsgrenze, die man überschreiten darf. Es gibt nämlich noch ein "Gesetz" außerhalb des Gesetztes, und es ist einzig unser ästhetisches Empfinden, das dieses "Gesetz" und damit die Zulassungsgrenze definiert.

Ästhetisches Empfinden aber ist in jedem Fall gleichzusetzen mit einem sinnlichen Urteil, und es hat mit Logik nichts zu tun. Man kann es weder begründen, noch kann man darüber argumentieren. Für uns Japaner jedoch ist das ästhetische Empfinden ein exaktes und überhaupt das sicherste Richtmaß aller Bewertung.

Ich beobachte mit Besorgnis, daß unser ästhetisches Empfinden in letzter Zeit durch das Eindringen westlichen Denkens sehr gelitten hat und von uns als Maßstab mehr und mehr vernachlässigt wird. Das geradezu groteske Chaos in der Kultur und im Lebensstil des modernen Japaners ist das Ergebnis der Verbindung von Anschauungen, die miteinander unvereinbar sind. So mischt der Japaner sein Ideal harmonischen Zusammenlebens, dem er bereit ist, manches zu opfern, mit dem Individualismus des Europäers, der seinerseits nicht ohne weiteres bereit ist, der **Gesellschaft** Opfer zu bringen. Seinen auf ästhetischem Empfinden beruhenden Moralbegriff vermischt er mit christlichen Moralprinzipien. So trägt zum Beispiel der in Europa entstandene Individualismus, den die "fortschrittlichen" Japaner so sehr schätzen, in Japan nur dazu bei, den Egoismus zu fördern. Individualismus wird in Japan größtenteils falsch verstanden. Viele von uns verstehen darunter, daß man tut, woran man persönlich interessiert ist, ohne auf den anderen Rücksicht zu nehmen. Früher wurde eine solche Haltung von uns als unästhetisch abgelehnt. Um dem heutigen Chaos zu entrinnen und einer besseren Zukunft entgegensehen zu können, gibt es für den Japaner deshalb, so glaube ich, nur eine einzige Lösung, nämlich die, daß er sich auf sein ästhetisches Empfinden zurückbesinnt und es wieder zum Maßstab all seiner Bewertungen macht.

Die Korruptions- und Bestechungsaffären, wie sie in letzter Zeit so oft vorkommen, führen m.E. alle auf das Fehlen dieses ästhetischen Empfindens zurück. Sie sind, vom japanischen ästhetischen Empfinden her betrachtet, alle einfach "**häßlich**".

Was ich in diesem Zusammenhang besonders unangenehm empfinde, ist die Tatsache, daß die Massenmedien, die Massen und auch die angeblich so fortschrittlichen Intellektuellen, die sich in ihrem Leben in der japanischen Gesellschaft der Relativität zufrieden geben, sich, wenn eine solche Affäre an den Tag gekommen ist, plötzlich auf die in ihrer Welt eigentlich gar nicht existierende absolute Gerechtigkeit berufen, um die Angelegenheit als Skandal aufs schärfste zu verurteilen.

Die Innenpolitik Japans läßt viel zu wünschen übrig, aber da es kein Land in der Welt gibt, das sich rühmen könnte, alle Probleme gelöst zu haben, läßt sich meiner Meinung nach durchaus sagen, daß die japanische Innenpolitik unter den gegebenen Umständen relativ gut funktioniert.

Wendet man seinen Blick jedoch der Außenpolitik Japans zu, kann man nicht gerade behaupten, daß es dort keine Probleme gibt, und zwar einfach deshalb, weil dort unsere Ästhetik keine Gültigkeit hat.

Bei der Außenpolitik ist selbstverständlich erforderlich, daß man seine Meinung klar und deutlich äußert. Eine Ausdrucksweise wie etwa im "*haiku*" oder in der Tusch-

malerei ist dort fehl am Platz. Sie muß vielmehr so sein, wie sie sich in einem Gedicht von Byron oder in der Malerei von Holbein zeigt. Eine auf den anderen bezogene Behauptung, die sich je nach Situation ändert, hat hier keine Gültigkeit. Hier sind nicht Entscheidungen nötig, die auf dem Prinzip "Sowohl als-Auch" beruhen, sondern Maßnahmen, denen das Prinzip "Entweder-Oder" zugrundeliegt. Man ist gefordert, Zusammenhänge zu erkennen und das Ganze zu überschauen, ohne sich in Einzelheiten zu verlieren . . .

Mit folgenden Bemerkungen möchte ich mein Referat schließen.

Wenn wir als Japaner uns mit einem Gegenstand auseinandersetzen, betrachten wir ihn vom Standpunkt des Japaners aus. Das ist unser selbstverständliches Recht, und man muß sagen, daß es einfach unvernünftig wäre, von uns zu verlangen, wir sollten einen Gegenstand vom Standpunkt eines Mohammedaners oder eines Christen aus betrachten. Wir verwehren andererseits einem Ausländer das Recht nicht, Japan von seinem Standpunkt aus zu betrachten. Es ist daher nichts dagegen einzuwenden, daß Christen Japan unter dem Aspekt der christlichen Religion betrachten.

Es sollte selbstverständlich sein, daß jeder einen Gegenstand von seinem eigenen Standpunkt aus betrachtet, und die Mehrzahl der Länder in der Welt halten dies auch tatsächlich für eine Selbstverständlichkeit. Es läßt sich aber auch nicht leugnen, daß es den Japanern nicht unbedingt in jedem Fall leicht fällt, sich nach diesem Grundsatz zu verhalten. Denn in Japan gibt es ja traditionell die "Ästhetik", daß "man sich in die Lage des anderen versetzt". Ich selbst halte diese Ästhetik keinesfalls für schlecht - im Gegenteil : ich halte sie sogar für eine hervorragende Ästhetik, da durch sie die japanische Gesellschaft so reibungslos funktioniert. Man muß jedoch berücksichtigen, daß es sich bei dieser Ästhetik um eine Ästhetik handelt, die ausschließlich unter uns Japanern Gültigkeit hat, die wir in der Einheitlichkeit der traditionellen japanischen Kriterien leben. Sie gilt also nicht für die Außenwelt. In einer Welt, wo sich Freund und Feind klar unterscheiden, wirkt eine solche Ästhetik eher nachteilig.

Doch abgesehen davon, haben wir Japaner sowieso nicht die Möglichkeit, uns in die Lage von Mohammedanern oder Christen zu versetzen. Es bleibt uns nichts anderes übrig, als - auf dem traditionellen Standpunkt des Japaners stehend - die Dinge mit den Augen des Japaners zu betrachten.

Die Aufgabe der Japaner von heute liegt m.E. darin, daß sie ihrer Außenwelt gegenüber erklären : "Wir verwehren es keinem, daß er uns nach seinen eigenen Richtlinien beurteilt, doch behalten wir uns gleichzeitig das Recht vor, den anderen ebenfalls von unserem Standpunkt aus zu betrachten." Die Japaner sollten dabei auch betonen, daß es eine Voraussetzung für die auf der Anerkennung des Partners beruhende Diskussion zwischen den Völkern ist, daß jeder die ihm fremden Aspekte der anderen Seite berücksichtigt.

Um dies realisieren zu können, müssen wir Japaner, so glaube ich, zunächst einmal unseren Standpunkt klarer und deutlicher ausdrücken. Wir müssen versuchen zu zeigen, auf welchen Grundsätzen japanisches Denken basiert, was wir voraussetzen, auf welche Weise wir leben - kurzum, wir müssen das Prinzip unserer "Ästhetik" präzisieren und sie unserem Gegenüber in seiner Sprache, d.h. in seiner Logik erklären.

Literaturverzeichnis

Fukuda, Tsuneari

Nihon o omou ; Tokyo 1969

Kawakita, Michiaki

Nihon-bijutsu nyūmon ; Tokyo 1966

Nakano, Osamu

Nihongata soshiki niokeru komyunikeishon to ishikettei ; In : *Nihon no shūdan-shugi* ; Tokyo 1983

Sakaiya, Taichi

Nihon towa nanika ; Tokyo 1991

Tanaka, Satoshi

Dialog mit dem Westen ; Tokyo 1983

BenDasan, Isaiah

Nihonjin to yudayajin ; Tokyo 1970

Yamamoto, Shichihei

Gendai no chōkoku ; Tokyo 1977

Yamamoto, Shichihei

Nihonjin-teki hassō to seiji-bunnka ; Tokyo 1979

Yamamoto, Shichihei

Nihon-shihonshugi no seishin ; Tokyo 1984

Yamazaki, Masakazu

Gekitekinaru nihonjin ; Tokyo 1971

Yamazaki, Masakazu

Muromachi-ki ; Tokyo 1974

Yamazaki, Masakazu

Geijutsu ; In : *Nihonjin no biishiki* ; Tokyo 1974